

低体温症による救急統計について

寒さが一段と厳しくなる冬季は、低体温症のリスクが高まることが予想されます。

低体温症とは、事故や不慮の事態などにより、体が冷えることで体温が低下し、正常な身体機能が保てなくなる状態をいいます。

気温などの環境要因のほか、加齢や持病の有無などが影響し発症するが多く、自身の体調や生活習慣、行動の中に潜む低体温症の発症リスクを認識したうえで、予防することが重要です。

本組合管内では、過去 10 年間（2015 年から 2024 年まで）で低体温症により 537 名が救急搬送されています。搬送された方の 8 割以上（85.3%）が「高齢者（65 歳以上）」で、また 7 割以上（79.7%）が「屋内」での発症となる状況でした。

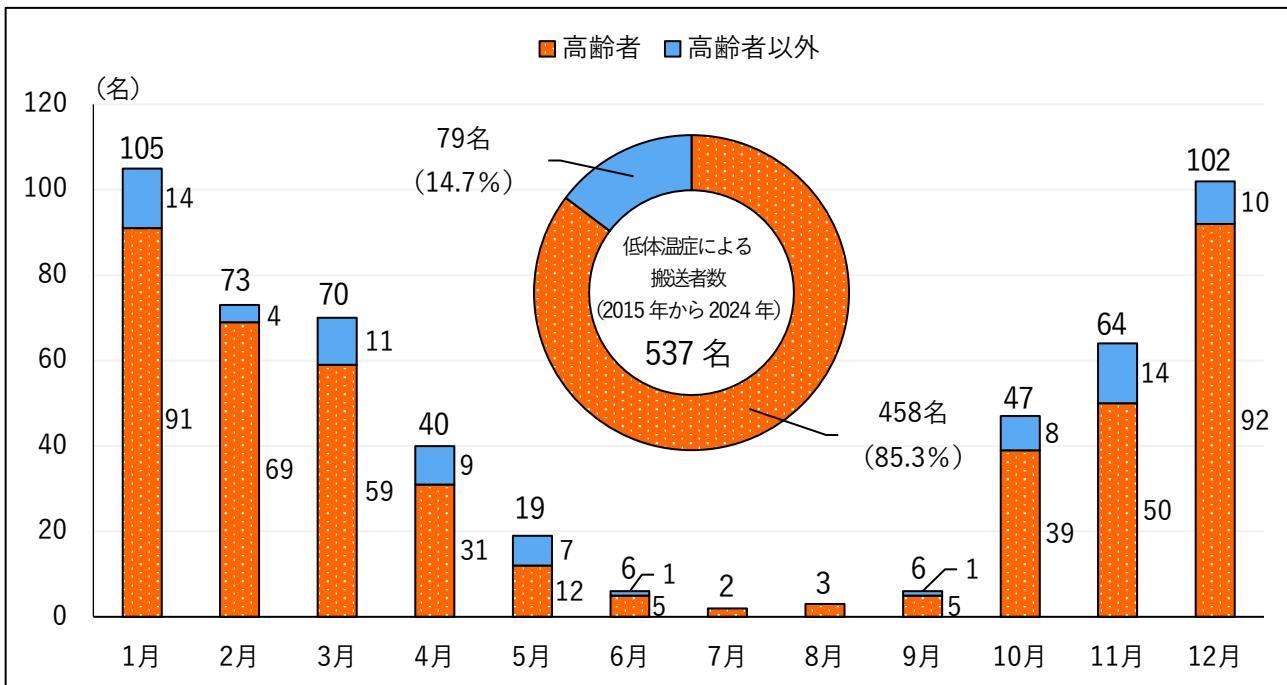
このような低体温症による事故防止を図るため、以下のとおり救急統計をまとめましたので、お知らせします。

※ 小数点を含むものは、少数点第二を四捨五入した数値

■ 月別の救急搬送人員

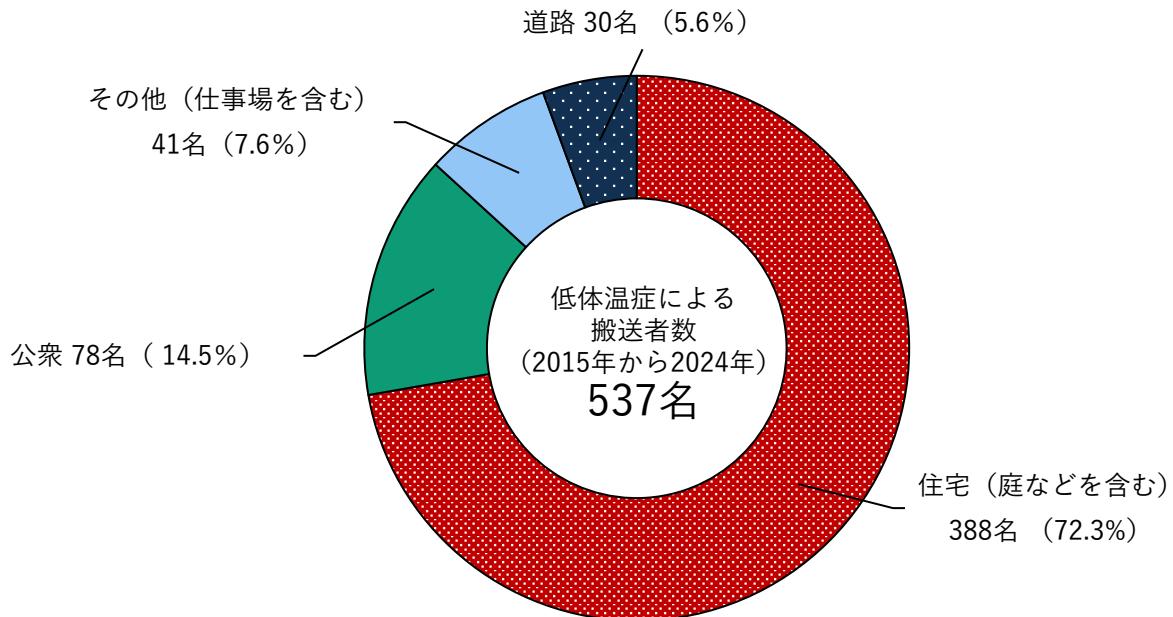
救急搬送人員を月別にみると、「1 月」が 105 名（19.6%）で最も多く、次いで「12 月」が 102 名（19.0%）、「2 月」が 73 名（13.6%）と続き気温が低い季節に多く搬送されていることが分かります。

また、救急搬送人員を「高齢者」と「高齢者以外」に分類すると、搬送人員が少ない季節を除き「高齢者」が圧倒的に多く総数で比較すると「高齢者」が 85.3% を占めています。



■ 発生場所別の救急搬送人員

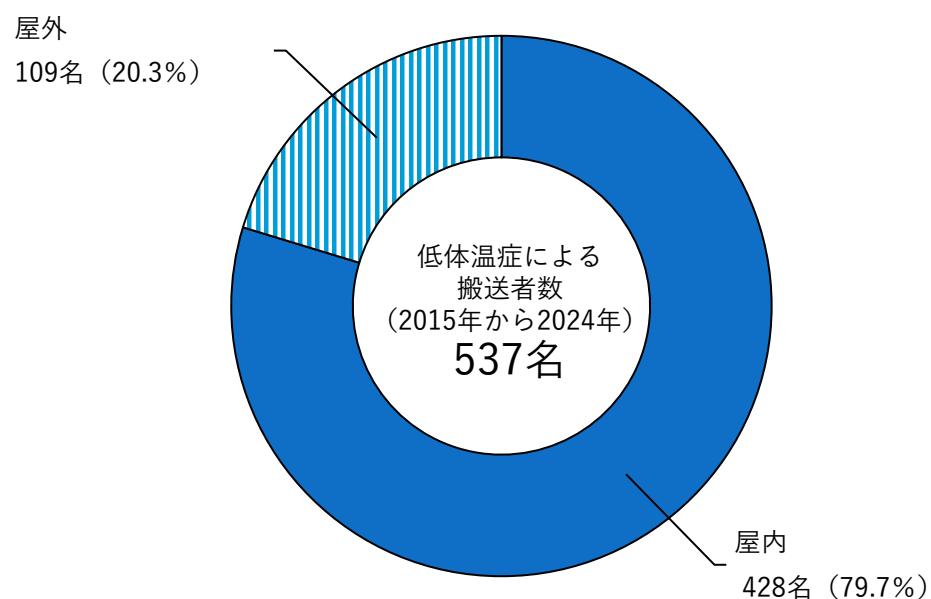
救急搬送人員を発生場所別にみると、「住宅（庭などを含む）」が388名（72.3%）で最も多く、次いで「公衆」が78名（14.5%）、「その他（仕事場を含む）」が41名（7.6%）、「道路」が30名（5.6%）と続きます。



■ 発生場所の屋内外別の救急搬送人員

救急搬送人員を発生場所の屋内外別でみると「屋内」が428名（79.7%）、「屋外」が109名（20.3%）となります。

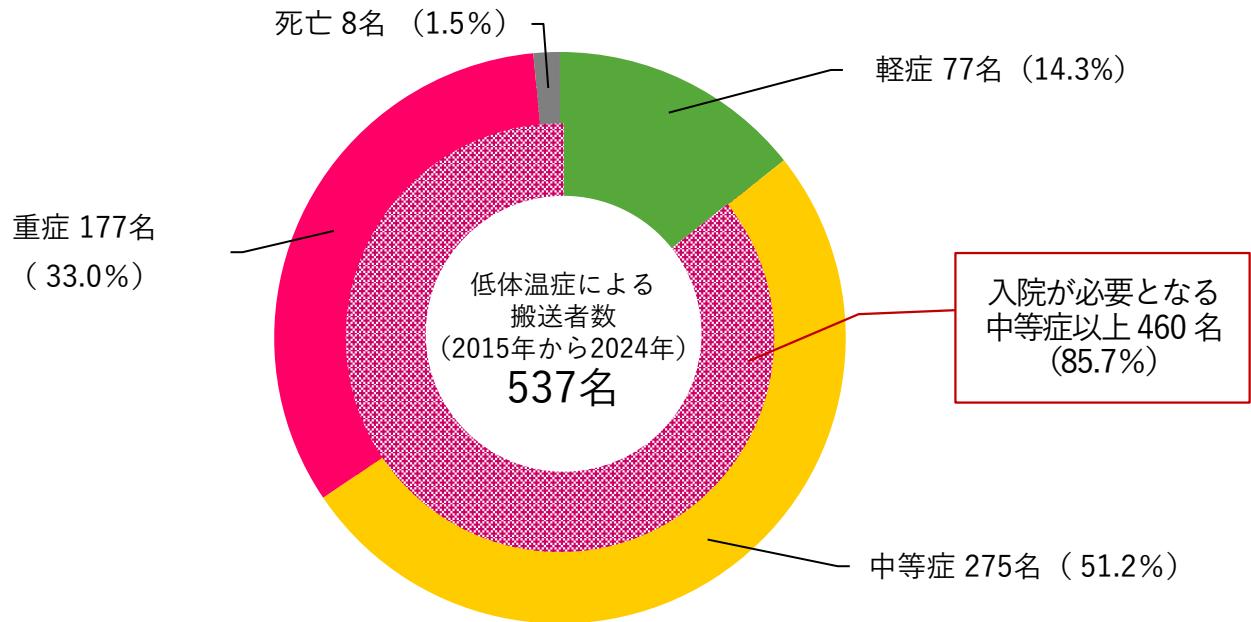
条件によっては「屋内」・「屋外」関係なく低体温を発症する可能性があることが分かります。



■ 傷病程度別の搬送人員

救急搬送人員を傷病程度別にみると「中等症」が最も多く 275 名 (51.2%) 、次いで「重症」が 177 名 (33.0%) 、「軽症」が 77 名 (14.3%) と続きます。

入院が必要となる「中等症」以上で 460 名 (85.7%) を占めています。



■ 救急搬送の事例

- ◇ 一人暮らしの 90 代女性宅に家族が訪れたところ、自宅居間で倒れているのを発見し救急要請となった。 (1 月)
- ◇ 80 代女性、21 時に自宅寝室にて転倒し起き上がれず、翌日 7 時ころ、訪問した友人が発見し救急要請となった。 (2 月)
- ◇ 50 代女性、飲酒後屋外を歩いていたところ転倒し、前額部を受傷。倒れてからの時間経過は不明であるが、通行人が 110 番通報、駆けつけた警察官により救急要請となった。 (11 月)
- ◇ 80 代男性、自宅のトイレ前で倒れ動けずにいたところ、訪問看護で訪れた看護師により救急要請となった。 (3 月)

■ 保温について

応急手当の保温方法をご紹介いたします。

- ◇ 濡れている衣服を着ていれば衣服を脱衣し、体表面が濡れていれば、乾いたタオルで拭く。
- ◇ 室内の温度調節を行う。暖房により室内を温める。
- ◇ 直接床に寝ている場合、床から体温を奪われるため毛布を使い、保温を行う。

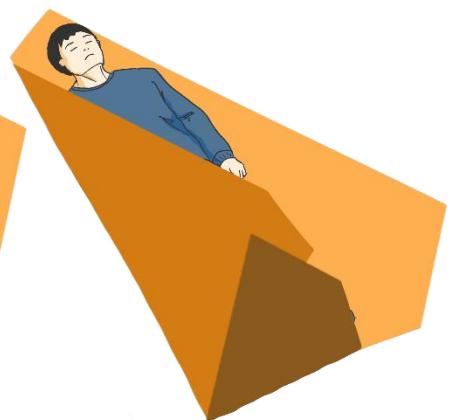
■ 毛布を使用した保温方法

毛布を使用した保温方法を紹介します。

① 毛布の角に頭の位置を合わせる

▶ ② 左右のどちらか毛布の角を折り込む

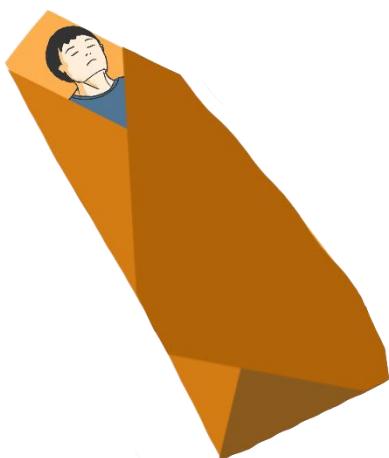
▶ ③ 足側にある毛布の角を折り込む



※衣服が濡れている場合、脱衣します

▶ ④ 残った毛布の角を織り込む

▶ ⑤ 布団などさらにかけると保温効果が増します



イラスト：郡山地方広域消防組合総務課